

教育への「行政犯罪」

特集1

教育科学研究会編集

教育

No.815

教師には「教育の自由」と「身分的安定」が必要

八木英二

若い教師たちに会いに行く

霜村三二

働きがいのある学校は子どもにも居心地がいい

伊藤辰久

「安倍教育改革」の先取りを競う北海道

山田守成

「不当な支配」が止まらない

小池真人・佐久間洋平・村石真依子・鈴木敏夫・

武者一弘・小林克己・久富善之

異常・違法な教科書採択への行政介入

小林善亮

安倍内閣のゼロトレランス型教員管理政策のゆくえ

佐藤修司

特集2

子どものネット依存と LINEの世界

ソーシャルメディアを漂流する子どもたち

加納寛子

LINE——簡単・便利・悲痛な人間関係

古野陽一

子どもがLINEにハマるしくみ

今度珠美

日常的にとりくむメディア・リテラシー実践

佐藤和紀

12

2013.December

かもがわ出版

ストリートで生きる子どもたち

フェリス女学院大学非常勤講師
東 宏乃
AZUMA Hirono

大人への不信感

「大人なんて、大嫌い！ よく私をぶつし、あっちへ行けと蹴るんだもの」、8年前、10歳だったの女の子、サニアちゃんは、泣きながら叫んでいた。

サニアちゃんは、農村部出身のストリートチルドレン（以下、ストチルと略す）

で、「オポロジェヨ・バングラデシユ」（オポロジェヨとはベンガル語で「絶対負けない」という意味、以下、A Bと略す）というNGOが運営するジャトラバリ・ドロップ・イン・センター（一時庇護所。以下、DICと略す）の「常連」であった。

彼女が抱える事情は実に深刻だった。田舎で暮らしているとき、母親は心を病み、まだ小さいサニアの弟の首を絞めて殺した。母親は村には居られなくなり、サニアを連れて首都ダッカに出てきて、スラムに住んだ。しかし、精神的な問題を抱える母親は働けず、サニアは小さいころから路上で物売りをせざるをえなかった。

サニアのように、農村部から首都ダッカなどの都会に出てきた者が多い。

いちばん多いケースは、義理の父親から逃れる例だ。女性の働き口のないイスラム農村社会にあって、夫が死亡したり、夫が家に帰って来なくなったりした場合、女性はいない再婚するしか生きるすがたがない。するとその女性の子どもは、義理の父親と暮らすことになるが、よい関係を築く

ことがなかなか難しく、子どもは、家を出ることになる。つぎに多いのは、親の暴力から逃れて家を出る場合である。そして、3番目は、ちょっとした遊び心で、トラックや長距離列車に紛れ込んだ方がいいが、途中で寝てしまい、起きたらダッカに着いていたというケース。つまり、迷子になってしまった場合である。

ストチルは、たいいてい裸足で、地方から出てくる人の集まりやすいジャトラバリ・バスセンター（東京でいえば新宿駅西口など）やコムラプール駅（東京でいえば上野駅など）などで、汚い手のまま、水や新聞やスナック、季節によっては果物を売っている。

大人の商売人から品物を預かって売ることが、売上をその大人にピンはねされることもある。お金のないストチルは、ごみ拾いをして、屑のなかから、紙や金属を選んでリサイクル屋に売って食事代を得ている場合もある。

しかし、路上で稼いだり寝ていたりしていると、警官にこん棒で殴られたり、周囲の大人になじられたりすること多い。つ

まり、ストチルは街のやっかい者というわけ、三つのタイプに分類できる。

①親がスラムに暮らしていて、子どもが路上で物売りをする場合。

②親はいずれ、路上で寝泊まりもする場合。

③親がいて家があっても、DVなどの理由で、自分の家に帰りたくない場合（だいたい②に移行することになる）。

やっかい者扱いをされたストチルは、ますます大人不信に陥っていく。

そして、ユニセフの調べでは、バングラ



青空教室で文字を習うストリートチルドレン

遊び場から青空教室へ

ストチルの生活とNGOによる支援を概観しておこう。まず、バスセンターや船着場に、オセロゲームなどの台を置き、ストチルの遊び場をつくり、ストチルが集まりやすくする。そこにA Bのスタッフが通い、ストチルに声をかけていく。つぎの段階は、駅やバスセンターの片隅で青空教室を開き、遊び場から青空教室へと誘う。しかし、この段階はけっこう難しいらしい。ストチルが大人を信用していないからだ。青空教室のつぎの段階がDICとなる。

ストチルの生活とNGOによる支援を概観しておこう。まず、バスセンターや船着場に、オセロゲームなどの台を置き、ストチルの遊び場をつくり、ストチルが集まりやすくする。そこにA Bのスタッフが通い、ストチルに声をかけていく。つぎの段階は、駅やバスセンターの片隅で青空教室を開き、遊び場から青空教室へと誘う。しかし、この段階はけっこう難しいらしい。ストチルが大人を信用していないからだ。青空教室のつぎの段階がDICとなる。

ストチルの生活とNGOによる支援を概観しておこう。まず、バスセンターや船着場に、オセロゲームなどの台を置き、ストチルの遊び場をつくり、ストチルが集まりやすくする。そこにA Bのスタッフが通い、ストチルに声をかけていく。つぎの段階は、駅やバスセンターの片隅で青空教室を開き、遊び場から青空教室へと誘う。しかし、この段階はけっこう難しいらしい。ストチルが大人を信用していないからだ。青空教室のつぎの段階がDICとなる。

ここへは、大人のスタッフよりも、先輩ストチルが、新米ストチルを誘ってきて、アクセスが成り立つ場合が多いようだ。つまり、大人が誘うとストチルは、人買いだと警戒するからだという。

青空教室では、ストチルは、まず、あいさつや整列を習う。集団行動ができるようになるのだ。慣れて来たら、絵カードを見ながら、ベンガル語の読み書きを練習するなど、勉強面の支援へとすすむ。

青空教室で会った45人のストチルの9割は男児であった（身寄りのない女児は、たいてい家事使用人になっているからだ）。1日1回しか食べていない者が3分の1、2回が3分の1、3回が3分の1であった。2回の子どもは、朝と夜だけ。1回の子どもは、荷運びをしたのに、親方がお金をくれなかったからだと言った。

なりた職業は、ビジネスマン・医者・学校の先生などであった。女の子が1人、縫製工場の工員になりたいと言っていて、衣料産業が盛んなバ国のいまの時代性を反映していた。